

主 題：永遠のいのちが与えられる

聖書箇所：ヨハネの福音書 11章25－26節

25－26節、『イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。：26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。』。イエスはこのようにマルタに話されました。イエスが愛された一人の女性でした。マルタとマリヤ、そしてラザロという兄弟がいたのです。イエスはこの兄弟を愛して多くの時間を彼らと過ごされました。彼らが住んでいたのはベタニヤとって、エルサレムから東へ約3キロほど行ったところにある村です。今でも残っています。オリブ山をふもとまで下りて行ったところ。この11章を見て行くと、この兄弟の中のラザロが死を迎えたのです。マルタとマリヤは非常な悲しみの中にありました。そこにイエスが来られたという知らせが伝わったのです。そこでそれを聞いたマルタが真っ先にイエスに会うために出て行きます。マリヤは家ですわっていた様子が11：20に記されています。マルタはイエスにこのように言いました。21－22節「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」と。マルタはイエスがだれであるかを知っていました。恐らく、彼女はこれまでにイエスが死人を2度よみがえらせていることを聞いて知っていたのでしょう。いずれにしろ、マルタはイエスが神であるゆえに、たとえ人が死んでも生き返らせることができるという信仰をもっていたのです。そのマルタにイエスは「あなたの兄弟はよみがえります。」と言われました(23節)。するとマルタは、「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」と答えています(24節)。マルタはこのように神の真理を知っていたのです。その時にイエスは25節のことばを言われたのです。「わたしは、よみがえりです。いのちです。」と。イエスはここでマルタに何を教えたかったのでしょうか？今マルタはラザロを亡くして非常な悲しみの中にありました。その悲しみ、痛みから解放されるには正しい方向を見なければいけないのです。状況だけを見てはいつまでも解決はありません。イエスはマルタに「わたしを見なさい」と言われます。わたしがだれであるのかをもう一度思い出して見なさいと。そのことを話されるのです。ご自分がだれであるのかを教えて行かれるのです。私たちもいろいろな問題に遭遇しますが、その解決を得ることなく苦しみ続けて行くことは可能です。悲しみ続けてゆくことも、痛み続けてゆくことも可能です。もし、私たちが見るべき方を見なければ、仰ぐべき方を仰がなければ、いつまでもその問題の中にいることになります。このマルタにイエスが教えたかったことは「見るべき人を見なさい」、「見るべきところに目を向けなさい」、「わたしを見上げなさい」でした。

今日この25－26節から二つのことを学んでゆきます。つまり、イエスはマルタに二つの大切なことを教えられたのです。その一つは「よみがえりに関する事実」です。もう一つは「永遠のいのちに関すること」です。

A. よみがえりに関する事実 25節

イエスは「わたしは、よみがえりです。」と言われました。自分がどういう者であるかを語られたのです。イエスの復活は私たちに三つのことを教えています。

1) イエスは勝利者である

私たち人間にはどうすることもできない敵が存在します。死という問題です。考えないようにしても死は私たちに一日一日迫って来ています。明日のことはわかりませんが、確実なことは今日より明日は死に近づいているということです。自分の力ではどうすることもできない死という敵に対して、イエスはもうわたしはそれに勝利したのだと言われます。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」とパウロはIコリント15：55で言っています。イエス・キリストが死から敢然とよみがえってきたというこの事実は、死に希望が与えられたということです。つまり、よみがえって死に勝利されたことによって、私たちもこのイエスにあって死に勝利することができるという約束をいただいているのです。イエスの復活によって死という敵に勝利することができるのです。ヘブル人への手紙にはこのようにあります。2：14、15「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、：15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」。このみことばはイエスが何のためにこの世に来られたを明確に教えてくれています。イエスが肉体をもってこの世に来られたその理由は、悪魔という死の力を持っている者を完全に滅ぼすためであったと教えています。この死という力に対して私たちが勝利を得るためにイエスは来られたのです。人となってこの世に来られ、自ら進んで十字架にかかり、死んだあと約束どおり三日目にその死からよみがえることによ

て、ご自分が死に打ち勝った勝利者であることを明らかにしてくださったのです。ゆえに、私たちクリスチャンは死に対して希望をもっているのです。死を恐れていない人はクリスチャンでない人の中にもいるでしょう。「私は死など全然怖くない」という人がいます。どう思うかは自由ですが、この聖書は死後のさばきについてはっきり教えています。イエス・キリストの復活は人類に勝利の希望を与えてくださったのです。イエスは神であるゆえにその死から完全によみがえって死に勝利されたことを明らかに示されたのです。だから、私たちは希望をもってこの主を誉め称えるのです。

2) 人にはよみがえりが定まっている

人には必ずよみがえりがあることをイエスのよみがえりは明らかにしています。旧約聖書のダニエル書 12 : 2 を見ましょう。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。」。ヨハネの福音書の 5 : 28, 29 にこれとよく似たことをイエスが語っておられます。「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。:29 善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」、人々がよみがえること、墓の中にいる者が皆、声を聞いて出てくるときがやって来ると言います。パウロはコリント人への手紙第一 15 章でそのことを教えています。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。:53 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。:54 しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。」(15 : 51-54)。

イエスが死んでそれまでなら私たちは復活のことは言えないけれど、イエスが死から敢然とよみがえられたというこの事実は、私たちも死んだ後、だれも例外なくよみがえるということを教えているのです。私たちは確実に死に向かっており、だれしも肉体の死を経験しますが、それで終わってしまうのではありません。必ず神の声によって皆がよみがえる、その日が来るのだということを教えているのです。よみがえった後、神の前に出るときが来るのです。私たちの地上における歩みの清算をする日がやって来るのです。神の目を欺くことはできません。すべてのことをご存じの神の前に立つのです。よみがえりは必ず来ることをダニエル書にもヨハネも教えます。なぜそう言い切れるのか？イエスが死からよみがえったという事実がそのことを明らかにするからです。

3) 人にはよみがえりが必要である

イエスは「わたしは、よみがえりです。いのちです。」と言われました。「わたしは、いのちです。よみがえりです。」とは言っておられません。これには目的があるのです。人間は皆生まれながらに肉体的ないのちがあります。しかし、霊的には死んだ者だと聖書は教えています。つまり、人間は神に逆らって罪を犯しているゆえに、永遠のいのちの源である神から引き離されているということです。永遠のいのちを持っていないのです。霊的に死んだ者であるから私たちは霊的によみがえらなければならないのです。よみがえって新しいいのちをいただくことが必要なのです。イエスによって私たちは霊的に新しくよみがえるのです。イエスがニコデモに言われたことを思い出してください。ヨハネ 3 : 3 「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」、人は新しく生まれ変わることがなければ天国に行くことはできない、生まれながらの状態では永遠のいのちをいただくことはできないということです。神を受け入れていないからです。神に逆らっているからです。だから、イエスはこのユダヤ教の教師であるニコデモにそのことを話されたのです。

私たちは新しく生まれ変わることが必要です。そして、新しく生まれ変わった者には永遠の希望が与えられます。このことを黙示録はこのように教えています。20 : 6 「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」、これから後にどのようなことが起こるのかを教えています。「第一の復活」、「第二の死」ということばに注目してください。続いて 11 - 15 節を見ましょう。「また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行ないに応じてさばかれた。:13 海はその中にある死者を出し、死もハデスも、その中にある死者を出した。そして人々はおのの自分の行ないに応じてさばかれた。:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」。第一の復活にあずかる者は幸いであること、当然第二の復活がありますが、その復活には希望がないことを教えているのです。どういうことでしょうか？先ほど見たヨハネの 5 章にもあったように、神は善を行なった者はよみがえっていのちを受け、悪を行なった者はよみがえってさばきを受けると言われました。すべての人によみがえりがあると、ある人

は永遠のいのちに至るよみがえりを経験すると言います。ですから、20：6にある「第一の復活にあずかる者」とはその人たちのことなのです。神が神を信じた人たちをよみがえらせてくださり、神の祝福の中に、永遠のいのちへと導こうとされるのです。この人たちには第二の死はまったく意味がありません。「幸いな人々」です。そして、第二の復活があります。それが20：11から書かれていることです。死んだ人々が神の前によみがえってきます。12節にあります。その人々は皆神の前でさばきを受けます。その特徴は、第二の復活にあずかる人々はいのちの書に名が記されていないのです。第一の復活にあずかる人々はいのちの書に名が記されています。名が記されていない第二の復活の人はそれぞれ自分の行ないに応じてさばきを受けるのです。神の前ですべてが明らかにされて、第二の死へと送られるのです。肉体的な死だけでなく、その後に第二の死があるのです。「火の池に投げ込まれた」とあります。私たちはそれを「地獄」と言います。「永遠の火と硫黄の池の中」とあると聖書は教えています。永遠に終わることのない苦しみが待っていることを教えるのです。ですから、第一の復活にあずかった人々は、いのちの書に名が記されているゆえに、その人たちはよみがえって神のもとに至ります。しかし、第二の死にあずかった人々は、その罪がさばかれて永遠の地獄へ送られてゆくことを聖書は約束しているのです。カギはいのちの書にどうすれば名を載せることができるかです。

生まれながらに霊的に死んだ状態から、新しいいのちを持つようにと神は言われます。私たちにはよみがえりが必要であることをイエスの復活を通して、みことばの約束によって教えてくださるのです。

B. 永遠のいのちに関しての教え 25b-26節

イエスはよみがえりだけでなく、永遠のいのちについても教えておられます。「わたしは、いのちです。」と。これはイエスが永遠のいのちを持っておられることを明らかにするのです。ヨハネ1：4に「この方にいのちがあった。」とあるとおりです。イエスは人々に繰り返しご自分がだれであるかを明らかにされましたが、その中の一つ、「わたしはいのちのパン」だと言われたことが、同じヨハネ6：33-35にあります。「というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」34そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」**「神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるもの」と**言われました。神のパンは天から下って来て人にいのちを与えるものだと言うのです。そして、その神のパンがだれであるかを明らかにされたのです。「わたしがいのちのパンです。」と。そして、40節を見てください。「**事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。**」、イエス・キリストは人々に永遠のいのちを与えることができると言われるのです。同じヨハネの14：6でイエスは「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。**」と言われました。わたしが唯一のいのちだと、わたしだけがほんとうのいのちであると言われたのです。永遠のいのちを求める者にそれを与えることができるのだということを明らかにされたのです。

そのことを知っていた人たちはこのように言います。使徒の働き3：15「**いのちの君を殺しました。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。**」と、このように弟子たちは初代教会にあって伝道して行きました。あの十字架で殺された人、十字架でいのちを落とされた人はいのちの君だったということです。この「君」というのは「創始者」という意味です。いのちをお造りになった方です。人間ではないのです。イエスご自身の中にいのちがあったのです。だから、求める者にそのいのちが与えられるのです。同じヨハネが書いたヨハネの手紙第一5：11に「**そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。**」とイエスのうちに永遠のいのちが存在していることを明言しています。そして、イエスを信じる者にそれを与えられたのです。12節「**御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。**」、続いて13節「**私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。**」、そして、20節、「**しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。**」。ヨハネは繰り返し私たちに教えます。このイエスがどういうお方であるかということ。イエスは「いのちの君」であり、彼だけが人々に永遠のいのちを与えることができるということを明確に教えたのです。

イエスが「わたしは、いのちです。」と言われたことが私たちに教えることは、

- 1) イエスは永遠のいのちを持っておられること
- 2) 私たちにこの永遠のいのちが必要であること

例外なく、この世界中の人々すべてに必要なものはイエスが与えることのできる「いのち」です。す

でに見て来たように、このイエスによって私たちは永遠のいのちをいただくことができます。そして、このイエスのいのちをいただかなければ、罪の赦しをいただかなければ、私たちは自分の為してきた罪の報いを自らの身に受けることになります。自業自得だといえればそれまでです。しかし悲しいことに、さばかれて当然な私たちに神は救いに御手を差し伸べてくださっていたが、それを私たちは意図的に自分の意志で拒んだという事実です。なぜ神の救いを拒んだのか、罪の赦しをいただこうとしなかったのか、その責任は救いを拒んだその人にあるのです。

歴史を振り返って見てください。クリスマスをなぜお祝いするのか、キリストが誕生されたことです。救い主がこの世にお生まれになったことです。あなたをその罪から救うために救い主は来てくださり、救い主はあなたの身代わりとなって十字架で死んでくださった、そして、その救い主は死から敢然とよみがえることによって、「わたしは、よみがえりです。いのちです。」と言い、それを証明してくださったのです。まだ、このときはイエスは十字架にかかっておられませんでした。この後にイエスは言われていた通りに十字架にかかり、約束通り死後三日目によみがえることによって、ご自分の言われていたことが事実であることを明らかにされたのです。この救いが必要であることをイエスは繰り返し言われるのです。ヨハネ14：6「**イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」**」、聖書は明確に私たちに真理を教えています。イエスが唯一の真理であり、いのちであること、イエスだけが唯一の神が備えられた救いの道であると。罪が赦されていなければ第二の復活であり第二の死が待っています。自分の罪が公平に正しく審判を受けるその日です。このような警告を神は私たちにしておられます。

25節の続きに「**わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。**」とあります。この「死んでも」とは肉体的な死のことです。肉体的な死を経験したとしても生きるのだということです。永遠に生きること、永遠に天国で過ごすことを言っているのです。そして26節「**また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。**」と言われました。肉体的にまだこの地上で生きていてイエスを信じる人は、決して死ぬことがない、これは肉体的に死ぬことがないというわけではありません。永遠に死ぬことはない、第二の死を経験することはないということです。罪赦された人が永遠の地獄に行くことはない、そのことをイエスはここで話されたのです。「**このことを信じますか。**」とイエスはマルタに問われました。マルタはこのように答えています。27節「**はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。**」、イエスさま、あなたはすべての主権者である神であられ、救い主であられ、神であることを私は信じていますと。「信じております」というこのことば、動詞はこれまでも信じてきたし、これからも信じ続けて行きますということです。彼女の信仰告白です。彼女は永遠の備えができていたのです。

イエスがいわれたことは私たちへのチャレンジです。「わたしは、よみがえりです。いのちです。あなたはわたしを信じるか？」と。そのとき、わたしはあなたをよみがえらせ、新しく生まれ変わらせ、あなたに永遠のいのちを与えようと言われます。どうお答えになりますか？マルタは信じました。それゆえ、今彼女は神のもとにあります。この選択は一人一人に迫られているのです。

私たちは永遠のいのちをいただいて永遠の備えをなすこと、それが私たちには必要なのです。